HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共感する我 : メーヌ・ド・ビランの心理学と道徳の基礎についての試論［全文の要約］
Author(s)	長坂, 祥悟
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16490号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95171
Type	doctoral thesis
File Information	Shogo_Nagasaka_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

学位の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　　長坂　祥悟

学位論文題名
共感する我
―メーヌ・ド・ビランの心理学と道徳の基礎についての試論―

論文の観点と問題設定

本論考は、メーヌ・ド・ビラン（Maine de Biran, 1766-1824）の道徳哲学を「共感（sympathie）」の概念を鍵として再構成し、その意義を論じる。従来の研究では、ビラン哲学の認識論、存在論、宗教哲学が主に論じられてきたが、その一方で、道徳哲学に関する包括的な研究は限られている。特に、日本語での先行研究はほとんど存在しない。したがって本論考はその空白を埋める役割を担う。

ビランの道徳哲学は、中期哲学における「心理学（psychologie）」の課題を引き継いでおり、自我と他者との関係性を如何に説明するかが、一つの中心的な問題となる。彼は心理学において「原初的事実（le fait primitif）」や「努力（effort）」などの概念を用いながら、自我の実存を己の内で感じ取られる意志として捉えた。しかし、このように規定される自我が如何にして他者と関係をもち、社会的存在として道徳的意識をもち得るかは十分に説明されておらず、彼自身もこの課題を自覚していた。彼の道徳哲学は、この心理学の課題によって導かれた議論であり、自我が如何にして他者と交流し、かつ社会の中で道徳的な存在となるかを論じる理論である。それ故に、論者は彼の道徳哲学のみを対象とするのではなく、これを彼の心理学との関連を踏まえて考察する。すなわち本論考では、『心理学の基礎についての試論（*Essai sur les fondements de la psychologie*）』（1812）をはじめとする中期哲学の諸著作と、後期道徳哲学が展開される『道徳と宗教に関する諸断片（*Fragments relatif aux fondements de la morale et de la religion*）』（1818）を中心的なテクストに据え、ビランにおける心理学から道徳哲学への発展の過程を跡付ける。

この考察において、重要となるのがビランの共感概念である。ビランにおいて、人間は共感によって本質的に関係づけられている。つまり、共感こそが自我と他者との関係を論じる道徳哲学において基礎的な概念となる。しかし、ビランにおいて共感は本質的に本能の一作用であって、それ自体は道徳的ではない。したがって、共感がど

のように道徳性の構成に寄与しうるのかが問題となる。本論考では、この問題に取り組むために、共感概念を思想史的、概念的、比較論的な観点から分析することを中心的な課題とする。

研究の方法

本研究は、主に以下のアプローチを採る。

第一に、ビラン哲学を、自我の概念の分析を起点とし、中期心理学から後期道徳哲学へと連続的に検討する。『心理学の基礎についての試論』（1812）や『道徳と宗教に関する諸断片』（1818）などの主要著作を詳細に分析し、心理学がどのように道徳哲学へと展開したかを示す。

第二に、ビランにおける共感の概念を思想史的観点、概念分析的観点、比較論的観点から、詳細に分析する。共感が彼の道徳哲学においてどのような役割を果たし、自我と他者との関係をどのように構成するのかを検討する。加えて、共感が単に生理的な本能であるだけでなく、道徳性の形成において不可欠な要素であることを示す。

第三に、ビランの道徳哲学と宗教との関係を明示する。彼の思想では、道徳と宗教が密接に結びついている。なぜなら、他者との関係性の中で醸成される道徳性は、神の理念的な看取によって、普遍的なものとなるからだ。したがってビランの道徳哲学を論じるにあたって、宗教哲学との関連性を明示する必要がある。

第四に、ミシェル・アンリのビラン解釈を、ビラン哲学のより深い理解に資する重要な参照項として取り上げる。従来のビラン研究から一定の批判を受けてきたアンリの解釈は、ビラン哲学における理論構成の核心を鋭く突いているのみならず、ビラン哲学が既に内包しながら明示的に発展されなかった可能性をも暴露しうるものと評価できる。またアンリとビランの相違点を見ることによって、ビランの独自性もが浮き彫りとなる。

論文の内容

本論考は、全四章からなる。その内、前半 2 章では予備的考察としてメーヌ・ド・ビランの心理学が主題とされ、後半 2 章では彼の道徳哲学と宗教哲学、並びに共感概念が主題とされる。

第 I 章「ビラニスムの諸前提――自我の諸規定」では、ビランの後期道徳哲学を論じる前提として、中期哲学における心理学の枠組みを提示するために、能動的自我の概念を、ビラン哲学の重要な諸概念を分析、整理する。具体的には、「原初的事実」、「努力」、「固有身体（corps propre）」、「反省（réflexion）」、「人格（personne）」などの概念が俎上に載せられる。この分析を通じて、彼の心理学の焦点である、能動的な自

我、「意識（conscience）」の基本的な構造が判明となるだけでなく、自我の経験の重層的な位相が明らかになる。さらに、このように提示されるビランの能動的な自我が、コンディヤックやデカルトの哲学が描出するに至らなかったその実相を有していることもが示される。

第 II 章「心理学の方法と学知の基礎」では、メーヌ・ド・ビランの心理学の方法論とその特性を考察する。この考察のために、次の二点に着目して議論を進める。第一に、心理学の実践的な側面に注目し、「混成的な学知（la science mixte）」としての心理学を考察する。それは、人間を感性的かつ知性的な「二重の人間（homo duplex）」として捉える学知であり、情感的経験を記述しつつ、それを抑制し知的能力を育成する実践的意義を持つものである。第二に、「反省的諸観念（les notions réflectives）」に焦点を当てる。これは力、実体、原因、自由など学知の根本概念を指し、ビランはこれらが「原初的事実」に基づくとする。論者はミシェル・アンリの解釈を参照し、自我を基盤としたこれら概念の導出を通じて、ビランの心理学の特性を明らかにする。

第 III 章「メーヌ・ド・ビランの道徳哲学」では、道徳哲学において共感が自我と他者との関係を形成し、道徳性の構築に寄与することが論じられる。この議論を通じて、共感が道徳性の基礎であることが示される。他方で、共感の普遍性は神の絶対性によって保証されるのであり、その神の絶対性を看取するのは理性である。このことから、道徳的普遍性の問題は宗教の問題に還元されるように見える。しかし、道徳的普遍性を保障する神を看取することにとっても共感は必要不可欠な要素である。なぜなら、家族的な親愛の情としての共感がないならば、その類比によって感得される宗教的感情はなく、したがって、父としての神は理解されないからである。このようにして、共感が他者との関わりの中で構成される道徳と、道徳性を契機とする宗教の根底に存することが明らかになる。

第 IV 章「共感と生の共同性」では、前章によってその重要性が明らかになった共感概念を詳細に分析し、それに基づくビランの他者論の特徴を探る。まず、論者はこの概念を巡る思想史的系譜を研究する。共感を道徳性の一契機とするビラン道徳論の着想はたしかにアダム・スミスの『道徳感情論』の影響を思わせるが、しかし論者はそこにソフィー・ド・グルーシー（コンドルセ夫人）、そしてカバニスの影響関係があることを主張する。次いで、共感による経験とその本質を、「情感（affection）」の一様態として、仔細に分析する。その分析によって、共感が非道徳的な性格を有しながらも、しかしそれに故に道徳的生の構成要素であることが明かされる。最後に、論者は、ミシェル・アンリを導き手として、ビランの共感による自我と他者との共同性の特徴と、ビランの他者論、あるいは共同体論の可能性をも探究する。

論文の結論

以上の議論を経て、本論考は次の結論を提示する。

メーヌ・ド・ビランの道徳哲学において、道徳性は共感と人格及び能動性との関係性に基づいて構成される。共感は道徳的性格を有しないものの、本性的に自我と他者との関係性を形成するために、道徳的生の前提となる。道徳的な自我とは、共感による他者との関係の中で、己自身の実存や能力を反省する存在である。このとき、共感は純粋に本能的であるわけではなく、能動性の発揮によって補正され、その結果、他者に対する義務の遂行が可能となる。

さらに神の理念的看取にとっても、共感は重要な契機となる。神の愛情や原因としての神に対する感情は、家族の親愛の感情といった道徳的感情との類比によって感得されるものである。したがって、宗教的感情は道徳的感情に基づいている。この道徳的感情は、他者との関係性の中で生じるものだから、当然共感に基づくものである。かくして共感は、道徳のみならず神に対する宗教的感情をも規定するのである。だからビランにおいて、道徳と宗教の根底に共感があると言える。

さて、ビランはたしかに他者を主題として論じるわけではないものの、彼の道徳論の中心に他者論を見ることができる。共感は感覚性を有する生命全般が有する本源的な作用である。したがって他者との紐帯は、生命原理において既に決定されている。この点で、ビランの他者論は、アンリが提示する生の共同体論に接近すると言える。ただし、アンリが強調する存在論的視点は、ビランの道徳論の中にはないと言わざるを得ない。

他方で、共感は無意識性、あるいは非人格性を根本的な性格とする。すなわち共感は、自我を他者へと同一化し、故に自我の同一性を揺るがして、自己疎外を引き起こしかねない。この点において、ビランの道徳哲学は道徳における共感の危険性をも示唆していると言える。彼の道徳哲学は共感が生み出す他者との共同性と危険性との両面を睨みながら、共感の作用から同一性を保護する、いわば「反感」としての人格的自我の形成を重視すると考えられる。